

芦安中学校（前期）自己評価書

平成26年8月22日
南アルプス市立芦安中学校
校長 中込 幸二

1 前期自己評価の経過

- (1) 前期教職員対象アンケート及び生徒対象アンケートの実施（7月）
- (2) アンケート結果の考察を基に職員会議にて改善方策の審議（8月22日）

2 学校評価の分析と改善方策

(1) 教育目標

〔達成状況〕

- ① 学校教育目標から出発した教育活動の展開、意識化については概ね良好な状況にある。年度の途中で、成果や達成状況をなかなか実感できていないが、学校経営方針を理解し教育活動を行っている。

〔改善策〕

- ① 今後とも学校教育目標を全教職員が意識し、その目標の達成に向けて、「芦中教育」としての日々の教育活動を組織的・継続的に取り組んでいく。

(2) 学校運営

〔達成状況〕

- ① 「校務分掌」については、なかなかスムーズに機能していない傾向も見られる。増えることはあっても、減ることはない職務を相変わらず少ない職員で抱える中、新任職員も多く、校務分掌が主担当だけががんばるのではなく、できるだけ多くの職員が取り組みに関わり、仕事を分担していくようになってきた。そうすることで、学校全体で取り組むという意識が図られてきている。
- ② 校内研究については、2つの柱（学校教育全体を通したコミュニケーションづくりの推進、英会話科の推進・発展）を中心に取り組んでいる。コミュニケーションづくりの推進では、合同朝の会や絆の集いを通して、他者とコミュニケーションをとる楽しさを知る機会を増やしてきた。英会話科では、事前・事後の検討会を開き、全職員が関わりを持って取り組むことができた。
- ③ 「報告・連絡・相談」は日常生活の中では良順調に流れつつも、個々の生徒の実態に深く関わるほど難しさを感じる。

〔改善策〕

- ① 学校現場の職務内容を考えると分掌を平均化することは難しい。従来通り学年体制で補える部分、職員全体でバックアップできる内容等、状況に応じて複数職員で対応できるような協働体制をさらに強めていかなければならない。併せて職員の異動に備えるためにも引き継ぎや共通理解を進める。
- ② オーストラリアのクインビアンの中・高校生が9月末に来校する。英会話科のさらなる充実を図るために授業改善に取り組む一方、このような機会も有効に活用しながら、学校生活のいたる所でコミュニケーション能力の育成を図っていききたい。しっかりしたあいさつが出発点である。

- ③ 職員室が授業や生徒の指導方針を共有できる場として、今後も機能させていきたい。

(3) 学習指導

〔達成状況〕

- ① 「進度」については、全校的に特に遅れもなく早すぎることもなく適度であった。また、これは生徒の「授業はわかりやすいですか」の結果にも影響を及ぼしてくると考えられる。
- ② 授業の深化や発展を考えると「学び合う学習」や「課題解決的な学習」の推進が大切である。「学び合う学習」については、生徒と教師との感じ方に若干の差があり、生徒の方が肯定的に捉えている。ただし理解度に差が生じてくると、基礎基本の定着に時間をかけざるを得ないのが現実である。
- ③ 「個に配慮した授業」も少人数の環境下だから推進可能ではあるが、「進度」とのかかわりもあり、必要は十分認識しつつも、あと一步の感がする。
- ④ 道徳の授業で「心から考えたり感じたりしていますか」に対し肯定度が高く、1学期に行われた道徳公開や日常の道徳の授業において、生徒がしっかり考えるような内容を扱っていた成果といえよう。2学期以降も道徳教育の推進に全校で取り組めるようにしたい。
- ⑤ 「英会話科の授業には意欲的に取り組んでいますか」は、教師側が校内研やそれ以外で綿密に準備をしつつも、生徒側からは否定的な回答があり、その理由や背景を確認する必要がある。

〔改善策〕

- ① 学力向上は一朝一夕に成果が現れるものではない。全国学力学習状況調査の上位県や大幅に改善が図られた県では、長年の取り組みや確固たる指導体制が確立されている。本校は生徒数も少ないので、正答率の比較等で一喜一憂することは無用で、全国や県の学力調査の結果等を分析し、生徒個々と本校の課題を把握する中で、PDC Aサイクルの手法によって全教師が授業改善を進めていく。
- ② 基礎学力の定着を図るために、まなびの時・放課後の補習の充実や保護者と連携し家庭学習の習慣化を図っていく。
- ③ 成果が見られた道徳は、授業は今まで通りにしっかり行う。さらに「しなやかな心の育成アクションプラン」に沿い、自他の敬愛や困難に打ち勝つ心の育成を学校の内外の機会を通して推進し、正しい判断力等の道徳実践力を育てるために、学校教育全体で指導を行っていく。

(4) 生徒指導

〔達成状況〕

- ① 「学年に仲良くしている友だちがいますか」は全生徒が「多く・複数」と回答しているが、学校生活について、あくまで本人の主観ではあるが「明るく楽しい」とあまり感じていない生徒が2名いる。「いじめや仲間はずれ」に関しては「友達をいじめたり仲間はずれをした・された」の両方への回答がある。「いじめ」の厳密な定義を理解してなくて、日常の行き掛かり上から派生したトラブルも「いじめ」と思っているケースもある。教師も日常生活の中で生徒間の好ましくない事案の報告や、現場の目撃も何回もありその都度指導を行ってきている。今回の回答に関しては「された側・した側」の両方の回答があったことから、両者に認識と反省の様子がうかがわれ、当該生徒達も紆余曲折はあっても仲良しの状態である。

- ② 「困った時に相談できる友だち・先生がいない」と回答する生徒が数名いる。昨年度後期の調査でも同様の回答状況であり、自力で対処するので「必要ない」と考えているのか、「必要だけれど本当にはいない」のかの実態までは把握できていない。
- ③ 「気持ち良いあいさつ」「適切な言葉づかい」は教師と生徒との間で評価が分かれている。生徒は現状でほぼ十分の傾向が認められるに対し、教師側はまだまだ不十分ととらえている。

〔改善策〕

- ① 普段から生徒の話聞く姿勢を持ち、信頼関係を深めるとともに、生徒の情報収集のアンテナを高くしておく。生徒の情報交換と指導方針を共有し合い、全職員で同じ歩調で対応していく。
- ② 適切でない言葉が発せられたときは、その場で指導する。また、お互いを認め合い、相手の気持ちを考えて発言したり行動したりできるよう指導していく。

〔5〕学校生活全般（行事・部活動・生徒会活動・・・）

〔達成状況〕

- ① 入念な準備や取り組みをしてきた「北岳登山」が9月に延期となり、拍子抜けの感は否めない中でも生徒は、「部活動」「太鼓」「合唱活動」「生徒会活動」「学校行事」いずれにおいても「そう思う」のA評価の割合が高く、意欲的に取り組んでいたと言えよう。ただし、いずれにおいても否定的な回答の生徒が1～2名おり、「意欲的に取り組めない・取り組まない」気持ちの部分について対応していく必要がある。
- ② 部活動をはじめ諸活動は、全校生徒が同じ時間と空間を共有して行うために、どうしても時間や負荷の感じ方に差が出てくる。
- ③ 教師も、諸活動の生徒の取り組みに対する評価はおおむね肯定的で、その成果も期待している。

〔改善策〕

- ① 登山については、「登らされている登山」でなく、主体的に登山に臨めるように、生徒の実態にあったテーマ設定を行い、達成感や成就感、自然の素晴らしさや厳しさを実感できる取り組みを今後とも考えていく。
- ② 学校生活の中でも大きな比重を占める部活動の指導では、子どもたちの意欲を向上させ主体的な練習を喚起していきたい。
- ③ 学校生活の中で、生徒の「主体性・自律性」は課題となっている。学習や諸活動の中で、生徒が選択し決定する場面をできるだけ取り入れていき、認める・褒める活動を意識的に行っていき、自己肯定感が持てるようにしたい。また、一人ひとりの生徒の実態に応じた指導や支援をしていきたい。

〔6〕家庭・地域との連携および小中の連携強化

〔達成状況〕

- ① 地域の人材の有効活用や地域行事への積極的な関わりは評価が高い。A評価の割合が高い。これは、全校登山に向けての事前学習等において、地域の方々に指導をしていただいたことや新緑やまぶき祭への参加に対する評価であろう。
- ② 家庭と学校との連携は、学校からの情報発信(各種たより、ホームページ)と家庭からの申し出や連絡

が密に行われ、おおむね円滑な学校生活が送られることで実感できる。1学期に学校側が行ってきた事に関して、保護者・地域の人々の反応はその時々聞くことができているが、2学期の保護者アンケートで詳しく聞くこととする。

- ③ 小中連携は、「隣接している小規模小中学校が9年間で子どもたちを育てる」という意識である。1学期は、全職員による4月当初の会議と行事(引取り訓練, 若葉給食, 教育を語る会など)や英会話科に関わる活動が主であった。成果を実感しつつも更に連携を深める必要がある。

〔改善策〕

- ① 家庭との連絡は密に行われている。「学力」については学習習慣を確立することが、生徒の学力向上に必要不可欠である。なお一層、家庭と連携して取り組んでいきたい。
- ② 今後も英会話科の取り組みを中心に、具体的な場面での小中連携の活動を行っていく。また、年3回行われる「小中連携会議」において全教職員が一堂に会すので、情報を共有し、建設的な連携を進めていく。中学校職員は小学校の児童を理解する機会とする。

(7) その他

- ① 前向きで、積極的に考える生徒が多いが、一部にそうでない生徒もいる。このギャップを埋めるための話し合い等を持ち、より良い「芦中教育」が推進できるようにしたい。
- ③ 生徒数・職員数が少ない中で、多くの活動を行っているため、一人ひとりの負担は大きい。しかし本校に魅力を感じて地区外から来る生徒も年々増えているので、本校の教育環境を生かして、更に良い「芦中教育」がなされるように工夫・改善していきたい。